

異文化を読み解く——中東

後 藤 晃
斎 藤 富 美 子

昨年八月にイラクがクウェートへ侵攻して以来、湾岸への関心は一気に高まった感がある。当初の関心は、日本の「貢献」論議にみられたように、石油の安定確保とアメリカの日本いじめの回避、つまりアメリカを中心とした国際政治の一極化の状況とその後の国際秩序への対応問題に焦点が合わされていた。しかし、時間がたつにつれて人々の関心の目は中東地域そのものにも向けられるようになった。イラクをひねりつぶすアメリカの軍事行動を全面的に是認するという雰囲気の中で、「政治的南北問題」を洞察し途上国である中東世界への正しい認識の必要性を感じた人も少なくはなかった。地域認識が欠落した状態では、「中東のヒットラー、フセイン」をつぶすという大義名分のもとで中東およびその石油に支配権を確実にしようとする先進国の論理を説得力をもって

批判することができないという問題が存在した。クウェートとはどういう国であり欧米はそこにどのような利害を附着させていたか、アラブ民族主義やイスラム主義のイデオロギーはどのような性格をもちパレスチナ問題とどう関わっているのか、また西欧と中東はどのような関係を歴史的にもつてきたのか、など地域認識に知識と情報求められた。

ただ、中国や東南アジアと比べると中東はやはり遠い。中東と深く関わった歴史がこれまでなく、地域理解の努力もされてこなかったことから、日本人にとって理解困難なことが多い。したがって、知識や情報があっても中東像を描くことがなかなかできない。イスラムとなるとまったくお手上げとなる。しかし「わからない」ではやはり困る。というのも、オリエンタリズムの偏見に満ち

た欧米の中東認識をそのまま輸入し受け入れるという危険性が絶えずつきまとうからである。中東認識への主体的態度がどうしても求められるのである。その材料として今日手にはいるものを主に中東関係の文献を紹介し、末尾に歴史、宗教、政治、経済、社会と文化に分けた比較的細かな文献リストを載せた。リストは、翻訳を含めて邦文で書かれたものを中心に、専門の研究書はできるだけ外し、また、宗教や歴史の一部を除いて近現代に限定した。文学作品も若干加えたが、これは、中東の文学には政治・社会・風土を表現したものが多く、小説が中東の時代状況なり社会を知る手掛かりを提供し「中東を読み解く」という編集の意図に添うと考えたからである。

《政治》

湾岸危機から戦争に至る過程、また戦後処理問題の解決の過程をみると、中東政治の枠組がしだいに浮き彫りにされてくるのに気がつく。つまり、中東世界を動かしてきた政治的イデオロギーや大衆的なアイデンティティの構図がみえてくるように思える。これをキーワードで表わすすると、次の語がピックアップできる。

アラブ民族主義、アラブ統一
 イスラム主義
 パレスチナとのリンク、シオニズム

少数民族クルドの反乱、シーア派の暴動
 「民族」と「宗教」という今日世界の各地にみられる政治変動の要因が中東においても重要性をもっていることがわかる。

フセインは、湾岸危機の際に「アラブの統一」とか「アラブ民族」という言葉を繰り返して使ったが、この言葉はイラクの政権党であるバース党の綱領にもうたわれており大戦間に東アラブで生れたアラブ民族主義の基本思想を受け継いできたものである。「アラブ統一」に関しては、これは今日のアラブ諸国にとっては現実性をもっていない。むしろフセインがこれを強調することに周辺諸国はイラクの覇権主義をみている。これに対して、「アラブ民族」という言葉にはアラブ大衆に一定のアイデンティティを呼び覚ますものがあり、フセインはこれを発揚する戦略的態度をとった。

このことはイスラムについても同様である。バース党自体は政治から宗教を切り離す世俗主義の立場をとってきた。しかし、戦争の過程で宗教的な発言が目立ち、フセインはこの戦争をジハード（イスラムの聖戦）とも言っている。彼の政治思想からすればおかしいことだが、これもアラブ世界の圧倒的な多数はイスラム教徒でありイスラムが宗教共同体として共通のアイデンティティの対象となっている現実に対する戦略であった。つまり、

民族と宗教は中東政治の基本的な枠組みをなしている。

パレスチナとのリンクの主張も繰り返された。イスラエルが占領地を保持したままなのにイラクのクウェート侵攻のみに徹底した攻撃が加えられるのはおかしいという。パレスチナ問題に対して今日アラブ諸国の多くは一種の後ろめたさがある。第二次大戦後、アラブ諸国にとってイスラエルとの対決はまさにアラブの大義であったしこれが四次にわたる中東戦争を可能とした。しかし、七〇年代半ばにエジプトはイスラエルと和平条約を結び、その他のアラブ諸国も自国の経済的・社会的問題に関心が向かい、この間にイスラエルは占領地の恒常的支配のための入植を着々と進めている。こうした状況でのパレスチナのアラブ人の危機感アラブ諸国の大衆も本来共有すべきものであり、この主張はアラブ大衆の支持を受けやすい性格のものであった。

いずれにせよ、アラブ世界を動かしている政治、宗教の枠組は、日本や欧米とは大きく異なり、湾岸危機を通してかなり明確化した感がある。

敗戦後は、イラク国内に潜在していた問題が吹き上がった。北部の少数民族クルドの反乱と南部のイスラム教シーア派の暴動である。クルド問題はイラン、イラク、トルコにまたがって居住するクルドに対する差別と自治運動として現われており、またシーア派の問題は、シー

ア派教徒がイラクでは多数派であるのに政権から排除されていること、そしてこのシーア派教徒がイスラム原理主義が権力を握る同じシーア派のイランの政治的影響を強く受けイラク分裂の要素となっていることにある。これらの問題は大衆のアイデンティティが分裂し複合しているイラクにおいて、フセインは政権の正当性をさまたげに模索する必要に迫られ、統合の試みがなされてきた。この危機が戦後の国内のクルドとシーア派の暴動として現われた。

このように、湾岸危機における中東の政治的動向から中東問題の理解のためのいくつかのテーマを見つけ出すことができるのであり、これに添って文献を紹介しようと思う。

中東の近現代における政治は、一九世紀末から今世紀にかけての植民地主義列強による分割、民族運動の高揚と革命、パレスチナにおけるアラブとイスラエルの紛争、イスラム革命など、きわめてダイナミックな変動をみせた。一九世紀から戦後までを記述した近現代史としては、岩永博『中東の近代史』、アラブ地域では中岡三益『アラブ近現代史』、非アラブ地域では、永田・加賀谷・勝藤『中東現代史Ⅰ トルコ・イラン・アフガニスタン』、加賀谷寛『イラン現代史』、宮治一雄『アフリカ現代史Ⅴ 北アフリカ』がある。中岡と永田は、中東の近現代史を

西欧との経済関係に配慮して記述しており、列強の経済進出、植民地化が中東の社会経済構造を奇形化していく過程をたどっている。戦後の自立化の時代にも構造の変容に比較的強い関心がおかれている。一方、加賀谷はイラン近現代を民族運動に重点をおいて記述している。また、民族運動を中心にシリア・レバノン・イラクなどの東アラブ地域における民族主義と国家形成を論じたものとして、木村喜博『東アラブ国家形成の研究』がある。

戦後の中東史を時代区分すると、一九五〇年代は民族主義の時代、六〇年代はアラブでは社会主義路線が優越し、イラン・トルコでは民間資本が徐々に成長し資本主義的發展のみられた時代、そして七〇年代以降はオイルショックの影響によって産油国・非産油国を問わず経済開発に拍車がかかり、その結果社会的諸矛盾が激化した時代といえることができる。

五〇年代を象徴する事件は、エジプトでは、五二年のナセル革命、五六年のスエズ運河国有化と第二次中東戦争、イランでは、反英民族運動と五年の民族主義者モサデク政権の成立、そして石油国有化である。イラクでも五八年にカセムによる革命で王政が崩壊する。エジプトを除くと政権は安定性に欠けイランではクーデターで王政が復古したが民族主義運動が政治に強い影響を及ぼした時代として一時期を画した。

ナセル革命については前記の中岡の文献が詳しく触れ、中産層の革命として性格規定をしている。またヘイカル『ナセル―その波乱の記録』は、エジプトのアラブ社会主義期の政治をナセルを通して描いている。イランでは石油国有化が宣言された時、イラン石油に権益をもっていたイギリスはアメリカなどに働きかけてイラン封鎖を実行した。この結果、イランは経済危機に陥るが、この時、日本は石油供給ルートの確保という思惑をもってこの封鎖を破ってイラン石油の輸入に成功する。この事件については読売新聞社戦後史班編『日章丸事件』に詳しい。

中東は、通常アラブ地域と非アラブ地域（トルコ、イラン、アフガニスタン）に区分される。アラブ地域とは、七、八世紀のアラブ帝国の形成以降、文化と社会を次第に共有するようになった地域を指し、オスマン帝国や西欧の植民地支配のもとでアラブ民族運動を通して民族意識が醸成された地域である。この民族のアイデンティティは現在の国境の枠を超えた広がりをもっているが、このアラブ民族についてはこれまでさまざまに論じられてきた。

バーシム・ムッサラーム『アラブ人』

矢島文夫『アラブ民族とイスラム文化』

植民地時代に生まれたアラブの民族主義運動は、植民

地期に線引きされ戦後これを国境に独立国家が成立した後も、しばらくアラブの連帯を可能とする運動として生きつづけた。アラブ民族主義はイスラエルとアラブを現状維持の状態におく米ソ主導の国際秩序のもとでアラブの政治の前提となっていた。この民族主義運動と政治イデオロギーの問題を論じたものとしては、アブデル・マレク『民族と革命』、サミール・アミーン『アラブ民族』がある。しかし、経済開発が個々の国の主要課題となり一国主義が蔓延すると、拡散の危機に遭遇することになる。

アラブ民族はアラブ地域の人々の帰属意識の対象となっているが、個々の国でみると大衆の帰属意識はより複雑であり多様である。エジプトはアラブでありながら他方でエジプトを郷土とするナシヨナリズムの場ともなっている。エジプト人はアラブであるがエジプト的でもある。奴田原睦明『エジプト人はどこにいるか』は、エジプト的なものの本質をさがそうところみたものである。

トルコの民族運動は第一次世界大戦後の列強のオスマン帝国処分と国家の復興をかけたケマル・アタチュルクの闘争の過程で高揚した。トルコ人の歴史およびトルコ的人格については、デイヴィド・ホサム『トルコ人』がある。しかし、この近代国家形成期以降生まれたトルコ

民族主義は、国内の他民族をその存在そのものを認めず、中央アジアから中国にまで分布するトルコ人を包摂しようとする汎トルコ主義的性質をもっている。今日トルコは国内に七〇〇万人程いるクルドの存在を認めていない。少数言語の調査を通してトルコにおける少数民族の実態を明らかにし、これまでのトルコ像に大きな転換を与えたものとして、小島剛一『トルコのもう一つの顔』がある。

パレスチナでは、入植したユダヤ人が一九四七年に独立を宣言したことでアラブとの対立が先鋭化した。この対立はアラブ世界に民族主義を強める契機となったが、ユダヤ側においてもシオニズムを高揚させた。ユダヤ人は一九世紀末以降にパレスチナの地に入植を開始するが、ユダヤ民族国家形成のイデオロギーであるシオニズム自体は、一九世紀後半に激しさを増したヨーロッパにおけるユダヤ人差別が契機となっている。ヨーロッパでなぜユダヤ人差別が激しくなったのか。これは資本主義と民族そして差別の問題としてこれまで様々に論じられてきた。

アーブラハム・レオン『ユダヤ人と資本主義』
サルトル『ユダヤ人』

ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』

また、シオニズム運動の歴史とパレスチナ問題を解説したものとしては次のものがある。

ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの

歴史』

PLO研究センター編『パレスチナ問題』

広河隆一『パレスチナ』

立山良司『イスラエルとパレスチナ』

デイヴィッド・シプラー『アラブ人とユダヤ人』

ジャンセン『シオニズム』

イスラエル国家の性格についても、以上の文献が、ファシズム国家、南アフリカの人種隔離政策と同じ資本主義の一体制とみるものなど、さまざまに論じている。とりわけ興味深いのは大岩川和正『現代イスラエルの社会経済構造』である。ここで彼は、入植地におけるユダヤ共同体をイスラエル国家の政治的・体制的基礎として、イスラエルをユダヤ共同体国家として性格づけている。

《経 済》

「中東の経済社会は近代西欧のインパクトが与えられるまで停滞的であった」という歴史観は一種のオリエンタリズムとして西欧の学者を長期に呪縛してきた。またイスラムの倫理は資本主義の発展にとってマイナス要素であるとも論じられてきた。この点ではウェーバー社会

学を継承する者、マルキストも例外ではなかった。このような発展西欧と停滞中東を対照としてとらえる考え方を否定する論調が近年強くみられるようになった。ターナー『イスラム社会学とマルキシズム』『ウェーバーとイスラム』は、マルキストとウェーバー主義者の中に巣くうオリエンタリズムを批判し中東の自立的な発展が西欧中心の世界経済の枠組の中で強く制約を受けたことを論証しようとした。またイスラムと経済の関係では、マキシム・ロダンソン『イスラームと資本主義』が歴史の実証と宗教社会学の方法で、商業活動や生産活動においてイスラムが制約要素となることはなく、資本主義的発展の遅れとイスラムは無関係であることを論理的に説明している。

西欧にオリエンタリズムを生んだ歴史的土壌は、一九世紀以降の中東に対する西欧の優越にあったといっている。つまり、西欧における産業資本の確立は中東をして工業製品の市場となし、また食料や原料供給地として農業国化した。この過程で中東の地域経済は崩れ、西欧の周辺地域として世界経済に包摂された。一九世紀の中東経済史をこうした観点で扱った単行本は邦文では数少ない。またオスマン帝国史に関しては、近年ウォーラー・ステインの世界システム論の影響が強くみられる。

石田進『帝国主義下のエジプト経済』

R. Owen, *The Middle East in the World Economy*
1880-1914

S. Pamuk, *The Ottoman Empire and European Capitalism 1820-1913*

H. Islamoglu-Inan (ed.), *The Ottoman Empire and the World-Economy*

国際分業関係の展開で中東が農業国として位置づけられる以前、エジプトでは近代化、工業化の努力がみられた。時代としては明治維新の半世紀も前である。しかし、社会構造の前近代性と不平等条約が原因で工業化は挫折した。この近代化の努力は今日では一つのエピソードに過ぎないが、挫折の原因については論争がある。この改革の主役ムハンマド・アリーについては岩永博『ムハンマド・アリー』が詳しい。

大戦間の中東地域の経済に関する文献は内外ともに乏しい。独立を保ったトルコはケマル・アタチュルクによる工業化が始まり、銀行制度を整備し国営企業と民間企業の並行的発展をはかるエタティズムの政策がとられた。イランもこれをまねて食品加工を中心とした官営工業を設立したがあまりうまくいかなかった。エジプトでも民族資本の萌芽的成長がみられる。いずれにせよ、本格的な工業化は、戦後に中東諸国が政治的自立を獲得してから始まるというてよい。

第二次大戦後、トルコではマーシャル・プランによる援助を契機に資本形成が図られ、民間資本の発展もみられた。ケマル・アタチュルク以降六〇年代までのトルコの経済政策と政治変動については、護雅夫編『トルコ社会と経済』がある。またイランでは、反英闘争を通して民族主義運動が高揚するが、運動の挫折する五〇年代末以降、国王の主導する近代化、工業化政策が推進される。

六〇年代に入ると、エジプトを初めとしてアラブの主要国で社会主義路線がとられる。この社会主義は、経済的側面のみを限り民間が資本の蓄積能力を欠きかつ新植民地主義を拒否して外資依存を嫌った国が選択した国家主導の蓄積形態の一つとして理解すべきものである。ナセルがとったアラブ社会主義の政策については、山根学『現代エジプトの発展構造』に詳しく紹介されている。

しかし、この期にも資本形成と工業化は順調であった訳ではなく、とくに民間の投資率は低かった。これを構造的に分析し、貧困の悪循環と低成長を説明しようとしたのが、ガラール・アミーン『現代アラブの成長と貧困』である。アラブ社会主義が消費性向が高く奢侈的消費を好む特権エリートを生み、軍事費を膨張させているという体制批判を内容に含むものである。

一九七〇年代になると、中東経済は転換期を迎え、開

放経済体制と積極的な開発の時代にはいる。エジプトでは、サダト以降社会主義路線が修正され、貿易拡大と外資導入の開放政策への転換がはかられる。トルコでは八〇年代に入ってEC加盟を意識しての開放経済体制に転換する。

産油国では、オイルショック以降積極的な開発に取り組む。莫大な石油収入を手にしてインフラストラクチャー投資および工業化に取り組んだ。砂漠の伝統社会に石油が湧き出たアラビア半島の国々でみると、インフラ重視の開発を第一段階とし、続いてサウジでは資源依存の工業化、クウェートでは利子生活者の道を、またバレーンでは金融立国を目指すことになる。これら産油国における七〇年代以降の政治・経済的変動、および開発を比較した概説書として、石田進『激動の湾岸世界』、小山茂樹『中東経済事情』がある。サウジアラビアの開発政策と国家の政治システムについて書かれた本としてはヘレン・ラックナー『砂の王国サウジアラビア』が優れている。伝統的社会に流れ込んだ石油収入は、特権層を潤し国内における所得格差を拡大すると同時に、開発による先進国への従属化を深化させた指摘している。

イランについては、フレッド・ハリデー『イラン』が開発と政治の問題を扱っている。開発政策が民族資本を育てる方向ではなく、外資と結びついた特権層の利害を

優先し、また、莫大なオイルマネーのばらまきによるインフレや所得格差の拡大は反政府運動を吹き出させたが、これには暴力装置を以って圧殺するというメカニズムがジャーナリストの目によって詳細に描かれている。また開発の諸矛盾が都市で吹き出し、革命前夜の様相を示すテヘランの状況をルポ風に記録したのもとしては加納弘勝の『イラン社会を解剖する』がある。

非産油国と産油国の開発政策を比較し、開発による社会矛盾の顕在化による国家統合の危機を論じたものとして、宮地一雄編の『中東の開発と統合』がある。この中の長沢論文では、産油国と異なり石油収入の少ないエジプトの食料暴動を検討し、都市の低所得層の増大が社会保障費を膨らませ、開発資金の獲得のためにこの削減をはかり、結果として暴動を招いた政府のジレンマが描かれている。

開発によって生じた所得格差やさまざまな社会的問題は、中東の多くの国でイスラム原理主義運動を活性化させる主要契機となった。八〇年代、イランやパキスタンではイスラム主義のグループが権力を握ることになった。イスラム原理主義の諸類型を政治・経済との関連で論じたものとしては、次のものがある。

中東調査会『イスラム・パワー』

岡倉徹志『イスラム急進派』

山内昌之『現代のイスラム』

厳格なイスラム主義を主張する国でイスラム経済の遵守が論じられるようになった。イスラム経済とは、コーランやムハンマドの言行をもとに編成されたイスラムの規範に基づく経済のシステムをいう。近代国家においては西欧近代の経済システムが深く入り込んでいたが、これを再びイスラム原理に戻すという動きのなかで、銀行の利子廃止も具体化されはじめた。このイスラム経済を論じたものに二つの立場の違いが認められる。一つは、黒田壽郎編『イスラム経済』でありイスラム主義に経済行動の理想を認める内容をもち、また一つは、石田・田中・武藤の『現代イスラム経済』であり、日本の商慣習と異なるイスラム社会に理解を深め取り引きや経営を円滑にする助けにしようというものである。

《中東・イスラム認識をめぐって》

今回の湾岸戦争では報道のありかたも大きな衝撃として残った。特に危機当初に見られたサダム・フセインに対するヒステリックな表現、戦争突入と同時に連日のように茶の間に映しだされる生中継の戦争シーン、CNNによる独占取材……一方、ベトナム戦争で自由な報道が、米国内世論を反戦へ導いたと反省した米国防総省はプール取材制度、検閲などを実施していた。メディアの通信

手段がハイテク化・国際化した一方で、メディアに対する取材規制、情報操作が改めて浮き彫りにされた。そして日本で報道される中東、イスラムに関する情報も多くはアメリカから輸入されているという、欧米の情報や反応に左右されやすい日本の問題もある。日本の中東のイメージはどのように形成されたのであろうか。特に中東という極めてポリティカルな地域を考える場合、深読みはしないまでもどのようなバイアスがかかっているのか留意する必要がある。

中東、イスラム認識のありかたをきわめて鋭く問題提起したものにエドワード・サイード『イスラム報道』『オリエンタリズム』がある。サイードは『イスラム報道』の中で、アメリカのマスメディアがイラン革命などイスラム世界の出来事をどのように報道し、またそれが一般人がもつイスラムのイメージ形成にいかに関与をあたえてきたのか、すなわち歪められたイスラムを作り上げる過程を緻密な分析によって立証している。ジャーナリストや専門家による安易な一般化、レッテル付け、権力や企業との癒着が、イスラム認識をいかに妨げているか指摘したのである。『イスラム報道』は、様々な波紋をよんだ『オリエンタリズム』のテーマをアメリカについて検証したものである。サイードは、ヨーロッパのオリエンタ（特にイスラム）に対する見方、考え方を広く「オ

リエンタリズム」としてとらえた。そしてその根底にある「西洋」と「東洋」とのステレオタイプな把握、すなわち東洋を後進性・官能性・受動性として類型化し、それに対置するものとして自らのアイデンティティを形成していった西洋の知の構造、知のレベルでの帝国主義を批判した。しかし、サイードが提起しているのは、「西洋」の「東洋」認識だけではなく、異文化をいかに表象するか、異文化をどう認識し理解するのか、という根本的な問題なのである。西洋と東洋との問題は、そのまま日本と中東、あるいはアジアの問題とおきかえることができ、私たちに提起された問題としても把握することができる。日本においても偏った中東、アラブの認識・イメージはいたる所で散見できるし、またヨーロッパのような歴史的な蓄積はないものの、欧米に影響され易いという日本の現実もある。一つの文化で別の文化を測り裁断することは、時として「表現される側」の尊厳を無視した危険な行為となる。「オリエンタリズム」は対象を把握し認識する際に陥りやすいこうした落とし穴へのひとつの警告と、また新たな認識へのつながりを与えてくれるともいえる。

《世界史叙述における中東・イスラム》

世界史の叙述が異文化の認識に与える影響は大きい。

歴史事象がどのように取り上げられ、叙述されてきたかによって世界史像は大きく変わる。ヨーロッパと中東・イスラムに関する限り、オリエンタリズムを反映した西洋中心史観、ヨーロッパ的価値観がまだ強く残っており、批判・再検討されなければならない点が多いことも確かである。しかし最近では、見過ごされていた歴史を埋め、新たな位置づけをせまる書が出版されるようになった。

例えば、アミン・マアルーフ『アラブが見た十字軍』、スレイマン・ムーサ『アラブが見たアラビアのロレンス』はこれまではヨーロッパ側の資料で構成されていた十字軍像、ロレンス像に、イスラム、アラブ側から光を与えたものである。アラブによればロレンスはむしろ裏切り者なのだ。伊谷敏郎『三日月の世紀——大航海時代』のトルコ、イラン、インド』は、「近代」のさがけとされる大航海時代が、ヨーロッパの拡大に視点がおかれすぎており、むしろその裏側で進行していたイスラム勢力再興という重要な点が軽視されていることを指摘する。またヨーロッパがイスラムとの出会いによって自己のアイデンティティを見いだしていく過程と、その歴史展開の場をとりあげたモンゴメリー・ワット『地中海世界のイスラム』は、イスラムとヨーロッパの関係に新たな視野を拡げてくれる。ヨーロッパ文化の発展に対するアラビア文化の貢献を詳細に論じたジクリト・フンケ『アラ

ピア文化の遺産』も興味深い。

《中東の社会》

都市、農村、遊牧民、その生活形態、宗教、価値観、家族関係、言語、民族性、国民性、アイデンティティ、思考様式、文化……社会という言葉から様々な語句が思いつく。まず、ごく一般的な、中東社会の特徴を述べてみよう。中東地域は地理的にかなり広範囲をカバーする。したがって風土も多様であるが、全体としては乾燥地帯であることが大きな一つの特徴となる。年間降雨量が非常に少ないため、生活の場における水利用が生活のあり方を規定した。またそれが生活意識の中に反映する場合もある。このような自然環境のため、伝統的に灌漑農耕と移牧を組み合わせた生活形態をとってきた。しかし古代から都市的・商業的生活が発達した地域でもあった。宗教についてはムスリムが圧倒的多数を占めるが少数ながらキリスト教徒・ユダヤ教徒の存在は重要性をもつし、各宗派を考えると相当数にのぼる。またアラブ・トルコ・イランといった主要民族の他にも独自の集団を構成するクルド人や、ベルベル人などがある。そしてこのようにさまざまな次元における複雑さにもかかわらず、基調となる文化と歴史的諸環境を共有しているため、中東をひとつの社会的・文化的地域とみなすことができるの

である（概説書としては矢島文夫編『民族の世界史II アフロアジアの民族と文化』がある）。

中東のこのように複雑な民族的・宗教的アイデンティティがさまざまな状況下でどのようにして社会的に維持されているのか、それを文化人類学に考察したのがD・F・アイケルマン『中東—人類学的考察』である。中東社会の多様なテーマ（遊牧、部族、家族関係、エスニティー他）をとりあげ、暗黙のうちに抱いている自明の事柄や既成概念を批判し、検証するという方法は特徴的であり、その意味で新たな視点を含む刺激に富んだ書といえる。一方、アーネスト・ゲルナー『イスラム社会』は同じ人類学の立場から、イスラム社会の多様な現実、さまざまな特性にもかかわらず、共通してみられる同質性を主張して、イスラム社会理論の構築を試みている。また大塚和夫『異文化としてのイスラーム』は日本の人類学者の立場からの異文化理解（そしてそこに投影される自文化）にも言及しており興味深い。

〔民族〕

中東は、一つの国家が多様な民族集団から構成され、また一つの民族がいくつかの国家に分散されているため、政治とのかかわりで一層その複雑さを増している。クルド問題やパレスチナ問題（《政治》の項目参照）のように政治問題化されないまでも、たとえばますます分離主義

が定着しつつあるアラブのように、アイデンティティを模索し続けている場合が多い。バーシム・ムッサラーム『アラブ人』は、「アラブ人とは何か」という民族の求める問いに答えるため、アラブ人自身の手によって書かれたものである。アラブのアイデンティティとは、変動するアラブ社会の中で、今では共通する文化・歴史に求められるという。言語、イスラム、都市、農村、科学、家庭と女性、西欧との関係、国家など基本的な観点がおさえられており、アラブ理解を助けてくれる好著である。これにさがけ同じ制作意図でテレビ用のドキュメンタリーシリーズ『アラブとは何か』も作られている。また、現地での体験に基づいて書かれた本にも、学ぶところは多い。風土の生態の影響がまざまざと見えるエジプト的性格を綴った奴田原睦明『エジプト人はどこにいるか』、小杉泰『エジプト・文明への旅―伝統と現代』、小島剛一『トルコのもう一つの顔』はいずれも長い滞在経験を持つ研究者のエジプト論、トルコ論として示唆に富む。またアラビア語という言語の特徴からアラブの思考様式を探究したものとして牧野信也『アラブ的思考様式』がある。

「都市、農村、遊牧」

中東の都市や農村とそこで生活する人々、遊牧民とその生活、生活文化については次の文献がある。『イスラム世界の人びと』（全五巻）は総論のほか、農民・牧畜

民・海上民・都市民という生活類型で、各巻が構成されている。民族学、人類学、社会学、地理学、経済学、歴史学の立場から、具体的な暮らしのレベルでとらえた人々の姿がまざままに紹介されており、読む者の興味を引く。また大野盛雄『イラン農民二五年のドラマ』『アフガニスタンの農村から―比較文化の視点と方法』、松原正毅『遊牧の世界―トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』、片倉もとこ『アラビア・ノート―アラブの原像を求めて』は、一般向けに書かれてはいるが、いずれも独自のフィールドワークに基づく調査報告である。また都市の住民に関する丁寧な調査報告が少ないなかで、ウニ・ヴィカン『カイロの庶民生活』は、庶民の実態を詳細に描いた貴重な一書といえよう。

「イスラムほか」

中東の主要な三つの宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラムは一神教という一つの流れから発した姉妹宗教である。とくにその理念が最高度に達したイスラムは、ただ単に狭い意味での宗教というだけではなく、思想、生活一般にかかわる総合的文化の総体であり、文明の体系である。また、すぐれて都市的な宗教でもある。だが、おおかたの日本人が抱くイスラム観は、「厳格な規律をもつ砂漠の宗教」といったイメージを抜け出せないでいる。特に複数の信仰対象を容認してきた日本社会には、

唯一絶対神という神観念、宗教観を理解しがたいことが、また中東地域の政情不安とあいまって、イスラムにマイナスイメージを必要以上に付加しており、それが、イスラム理解の障壁となっているのかも知れない。しかし中東のみならず世界諸地域（とくにアフリカなどでは着実にイスラム教徒が増加している）でのイスラムの影響力、インパクトは、無視できないものがある。わが国でも近年はパキスタンやイランからの入国者数が著しく増加しており、生活周辺でも様々なレベルで交わりの機会が多くなった。価値観、生活習慣の違いによる軋轢を少なくするためにも、イスラム理解はないがしろにできないものがある。

イスラム思想の概説書としては中村廣治郎『イスラム思想と歴史』が基本事項を要領よくまとめていてわかりやすい。また、三回にわたる講演記録を活字化した井筒俊彦『イスラーム文化』は、イスラムという宗教の特殊性、文化の性格、イスラム教徒といわれる人々の人類学的人間性、すなわちイスラムの本質構造が平易に解説されている。また井筒俊彦『コーランを読む』もセミナーの記録で、言語哲学の面からコーランを解釈したものである。イスラムを総合的に把握するための視点を提起したH・A・R・ギブ『イスラム 誕生から現代まで』は、平易なようだが内容の濃い概説書であり、W・M・ワッ

ト『ムハンマド―預言者と政治家』とともにイスラム理解のための基本書である。歴史関係では、板垣雄三・佐藤次高編『概説イスラーム史』が、コンパクトな形でイスラム世界全体の歴史をカバーしている。通史的な視野をもちつつ、支配とエリート、都市と農村、帰属意識をテーマに内容は専門的である。また『講座イスラム』は、「思想の営み」、「転変の歴史」、儀礼と社会慣行も含む「社会のシステム」、人間の生き方を主要テーマとした「価値と象徴」の四巻から構成されており、総合的に把握することができる。

その他、「社会学の祖」イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』や、イブン・ハズム『鳩の頸飾り』などの名著が原典から翻訳されて、岩波イスラーム古典叢書に収録されている。

中東のキリスト教に関する文献は少ないが、エジプトのコプトについて山形孝夫『砂漠の修道院』（中東のキリスト教諸派についてもふれている）、村山盛忠『コプト社会に暮らす』がある。ユダヤ教徒については、『政治』の項を参照のこと。

「女性と家族、社会の中の女性の問題」

一般に中東は、男系原理が強調された社会である。くわえて女性隔離にみられるように、イスラムという宗教が与えてきた影響（それについては擁護論と批判論があ

る)も見逃すことができない。例えば、家族や一族内での父権の強さ、女性と男性の生活空間の分離、ベールの着用、女子割礼……。もちろん社会での女性の地位は、各国の事情、都市と農村、所属する社会階層、教育程度によって格差があるし、旧弊も現在では中世的な遺物として廃されていることも多い。また第三世界固有の政治・社会状況や近代化との関連、地域の固有文化の影響など様々な要素を考慮する必要がある。あるいは独自の審美観、習俗をどのように理解するか難しい問題もある。女性にとって選択の自由がかなり制限された社会ではあるが、しかし中東の女性たちも変わりつつある。

日本で出版された中東の女性に関する著作は多くはない。全体像をつかむためには板垣雄三編『世界の女性史 中東・アフリカ』(二巻)がよい。伝統の眺望に重点をおいた「I 東方の輝き」では、古代から中世にかけて歴史上の個性あふれる女性たちが描かれ、また「II 閉ざされた世界から」では、現代の急速に変貌する社会に生きる女性たちに焦点が当てられる。中東の女性史を一貫して見とおすような構成がとられている。また、前出の『カIROの庶民生活』は、著者が女性人類学者であるため、女性でなければ知ることのできない生活空間、女性間の人間関係、結婚など、この面でも詳細で貴重な資料を提供している。同じ立場から『アラビア・ノート』にも、

遊牧民の女性たちのたくましく生きる日常世界が描かれているが、ここではイスラムの制約も好意的な解釈がなされている。しかし、一方では、因習や偏見によって抑圧されてきたアラブ女性の実態も見逃すことはできない。『イヴの隠れた顔—アラブ世界の女たち』など、最近たて続けに翻訳がだされているナワル・エル・サーダウィ(作家、精神科医として活躍しているエジプト女性)の一連の著作では、この抑圧の実態が克明に描かれ告発されている。

※『現代思想』(総特集 イスラーム・オリエンタリズムと現代、一七巻一四号、一九八九)のテーマの一つフエミニズムのなかで紹介されている言説は、「自分の言葉で、女性としての自分を語りだした」もので、変わりつつある中東の女性たちの端的なあらわれであろう。なおこの特集号は他にも現代のイスラムが内包する諸問題を取り上げている。

※文学については、例えばJ・A・アフマド『地の呪い』(イランの農村)、シャルカーウィー『大地』(エジプトの農村)、ガッサン・カナファニー『太陽の男たち他』(パレスチナ問題)、ユーセフ・イドリース『禁忌』(農村の季節労働者として働く女性)などの小説が、研究書以上に実態を伝え、理解に役立つことを付け加えて

おくにとどめる。

参考文献

〈政治・経済〉

中岡三益『アラブ近現代史―社会と経済』岩波書店 一九九一

中岡三益・板垣雄三『アラブの現代史』東洋経済新報社 一九五九

A・アブデル・マレク(熊田亨訳)『民族と革命』岩波書店 一九七七

サミール・アミーン(北沢正雄・城川桂子訳)『アラブ民族―その苦悶と未来』亜紀書房 一九八二

ジョージ・アントニウス(木村申二訳)『アラブの目覚め―アラブ民族運動物語』第三書館 一九八九

永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛『中東現代史1 トルコ・イラン・アフガニスタン』(世界現代史11)山川出版社 一九八二

加賀谷寛『イラン現代史』近藤出版社 一九七五

宮治一雄『アフリカ現代史V 北アフリカ』(世界現代史17)山川出版社 一九七八

矢島文雄編『民族の世界史11 アフロアジアの民族と文化』山川出版社 一九八五

長沢栄治編『東アラブ社会変容の構図』アジア経済研究所 一九九〇

小串敏郎『東アラブの歴史と政治』(第三世界研究シリーズ)

ズ) 勁草書房 一九八五

S・C・ペレティエ(前田耕一訳)『クルド民族―中東問題の起因』亜紀書房 一九九一

P・K・ヒッティ(岩永博訳・解説)『アラブの歴史』(上・下) 講談社(学術文庫) 一九八二・八三

B・ルイス(林武・山上元孝訳)『アラブの歴史』みず書房 一九六七

ロベール・マントラン(小山皓一郎訳)『改訳トルコ史』白水社(文庫クセジュ) 一九八二

三橋富治男『トルコの歴史』近藤出版社 一九九一(一九六四)

岩永博『中東の近代史』法政大学出版局 一九六二

岩永博『ムハンマド・アリー―近代エジプトの苦悶と曙光』清水書院 一九八四

アラン・ムアヘッド(篠田一士訳)『青ナイル』筑摩書房(叢書) 一九八七(一九七六)

M・ヘイカル(朝日新聞社外報部訳)『ナセル―その波乱の記録』朝日新聞社 一九七二

中岡三益『現代エジプト論』アジア経済研究所 一九七九

M・ヘイカル(佐藤紀久夫訳)『サダト暗殺―孤独な「ファラオ」の悲劇』時事通信社 一九八三

アンワル・エル・サダト(読売新聞外報部訳)『サダト―最後の回想録』読売新聞社 一九八二

松谷浩尚『現代トルコの政治と外交』(第三世界研究シリーズ) 勁草書房 一九八七

- 木村喜博『東アラブ国家形成の研究』アジア経済研究所
一九八七
- 読売新聞戦後史班編『日章丸事件—イラン石油を求めて』
冬樹社 一九八一
- バーシム・ムッサラーム(柳沢修訳)『アラブ人』日本放送
出版協会 一九八四
- 牧野信也『アラブ的思考様式』講談社(学術文庫) 一九七
九
- サニア・ハマディ(笠原佳雄訳)『アラブ人の気質と性格—
個人と集団の行動原理』サイマル出版会 一九七四
- 矢島文夫『アラブ民族とイスラム文化』(人間の世界歴史
9)三省堂 一九八一
- 奴田原睦明『エジプト人はどこにいるか』第三書館 一九
八五
- デイヴィド・ホサム(護雅夫訳)『トルコ人』みすず書房
一九八三
- 小島剛一『トルコのもう一つの顔』中央公論社(新書) 一
九九一
- 松村清二郎『イスラム・パワー(中東の戦略地政学)』サイ
マル出版会 一九八九
- 中東調査会編『イスラム・パワー』第三書館 一九八四
- 山内昌之『現代のイスラム—宗教と権力』朝日新聞社(朝
日選書) 一九八三

- 岡倉徹志『イスラム急進派』岩波書店(新書) 一九八七
- 加納吾朗『イスラームの挑戦 次に倒れるのはサウジ：な
のか?』講談社 一九八二
- 大野盛雄『イラン日記—疎外と孤独の民衆』日本放送出版
協会(NHKブックス) 一九八五
- 加納弘勝『イラン社会を解剖する』東京新聞出版局 一九
八〇
- ホメイニ(清水学訳・岩永博解説)『ホメイニ わが闘争宣
言』ダイヤモンド社 一九八〇
- ホメイニ(共同通信社訳)『わが革命—イスラム政府への
道』共同通信社 一九八〇
- J・P・サルトル(安堂信也訳)『ユダヤ人』岩波書店(新
書) 一九五六
- ジャンセン(奈良本英佑訳)『シオニズム—イスラエルとア
ジア・ナショナリズム』第三書館 一九八二
- 大岩川和正『現代イスラエルの社会経済構造』東京大学出
版会 一九八三
- パレスチナ・ユダヤ人問題研究会『パレスチナ—現代と未
来』三一書房 一九八五
- D・ギルモア(北村文夫訳)『パレスチナ人の歴史 奪われ
し民の告発』新評論 一九八五
- 岡倉徹志『パレスチナ・アラブ—その歴史と現在』三省堂
一九八四
- 広河隆一『パレスチナ』岩波書店(新書) 一九八七

立山良司『イスラエルとパレスチナー和平への接点をさぐる』中央公論社(新書)一九八九

デイヴィッド・K・シプラー(千本健一郎訳)『アラブ人とユダヤ人―「約束の地」はだれのものか』朝日新聞社一九九〇

藤田進『蘇るパレスチナ―語りはじめた難民たちの証言』

(新しい世界史12) 東京大学出版会 一九八九

湯浅赳男『ユダヤ民族経済史』新評論 一九九一

アーサー・ケストラー(宇野正美訳)『ユダヤ人とは誰か』三交社 一九九〇

アーブラハム・レオン(波田節夫訳)『ユダヤ人と資本主義』法政大学出版会 一九七三

ウォルター・ラカー(高坂誠訳)『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』第三書館 一九八七

PLO研究センター編『パレスチナ問題』亜紀書房 一九七二

藤本勝次・末尾至行・岡崎正孝編著『中東をめぐる諸問題』晃洋書房 一九八五

板垣雄三編『中東パースペクティブ』第三書館 一九九〇

浅井信雄『中東を動かすものは何か―情報分析からの洞察』日本放送出版協会 一九八八

浅井信雄『中東を読むキイワード』講談社(現代新書)一九八七

酒井啓子・池田明史・高橋和夫『中東問題が一番よくわかる本』日新報道 一九九一

る本』日新報道 一九九一

B・S・ターナー(樋口辰雄訳)『イスラム社会学とマルキシズム―オリエンタリズムの終焉』第三書館 一九八三

B・S・ターナー(香西純一ほか訳)『ウェーバーとイスラーム』第三書館 一九八六

C・カーエン(渡辺金一・加藤博訳)『比較社会経済史 イスラム・ビザンツ・西ヨーロッパ』(歴史学叢書)創文社 一九八八

家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店 一九九一

石田進『帝国主義下のエジプト経済―一九世紀エジプトの植民地化過程の分析』御茶の水書房 一九七四

M・ロダンソン(山内稔訳)『イスラームと資本主義』岩波書店(現代選書)一九七八

ガラール・アミーン(中岡三益・堀侑訳)『現代アラブの成長と貧困』東洋経済新報社 一九七六

サミール・アミン(山崎カヲル訳)『現代アラブ―経済と戦略』新評論 一九八一

山根学『現代エジプトの発展構造―ナセルの時代』晃洋書房 一九八六

フレッド・ハリデー(岩永博ほか訳)『イラン―独裁と経済発展』法政大学出版局 一九八〇

松谷浩尚『現代トルコの経済と産業―トルコ財閥の研究』

中東調査会 一九八九

護雅夫編『トルコの社会と経済』アジア経済研究所 一九

七一

ヘレン・ラックナー(岸田聡訳)『砂の王国サウジアラビ

ア』ダイヤモンド社 一九八一

牟田口義郎『石油に浮かぶ国』中央公論社(新書) 一九六

五

フレッド・ハリデー(岩永博ほか訳)『現代アラビア—石油

王国とその周辺』法政大学出版局 一九七九

瀬木耿太郎『中東情勢を見る眼』岩波書店(新書) 一九八

四

瀬木耿太郎『石油を支配する者』岩波書店(新書) 一九八

八

石田進『激動の湾岸世界 石油危機から十年のペルシャ・

アラビア湾』御茶の水書房 一九八五

岡倉徹志『ザ・ガルフ—石油と宗教をめぐる抗争』中央公

論社(新書) 一九八六

岩崎徹也『開発と石油の政治経済学—サウジアラビアと国

際石油市場』学文社 一九八九

エドワード・クレイペルズ(松宮丞二訳)『九〇年代の石油

支配—OPECは復権するか』三省堂 一九九〇

小山茂樹『中東経済事情—オイルパワーのゆくえ』有斐閣

(選書) 一九八一

ジェフリー・ロビンソン(青木栄一訳)『ヤamani 石油外交

秘録』ダイヤモンド社 一九八九

浜渦哲雄『国際石油産業 中東石油の市場と価格』日本経

済評論社 一九八七

鈴木弘明『エジプト経済と労働移動』アジア経済研究所

(研究双書) 一九八六

宮治一雄編『中東—国境を越える経済』アジア経済研究所

一九八九

宮地一雄編『中東の開発と統合』アジア経済研究所 一九

八五

石田進・田中民之・武藤幸治『現代イスラム経済—中東ビ

ジネスのすすめ』日本貿易振興会(ジエトロ叢書) 一九

八八

黒田壽郎編『イスラム経済—理論と射程』(国際大学・現

代中東選書2) 三修社 一九八八

〈中東認識と社会〉

エドワード・W・サイード(板垣雄三・杉田英明監修、今

沢紀子訳)『オリエンタリズム』平凡社 一九八六

エドワード・W・サイード(浅井信雄・佐藤成文訳)『イス

ラム報道』みすず書房 一九八六

イブン・バットウータ(前嶋信次訳)『三大陸周遊記』角川

書店(文庫) 一九六一

トール・ハンセン(伊吹寛子訳)『幸福のアラビア探検

記』六興出版社 一九八七

アミン・マアルーフ(牟田口義郎・新川雅子訳)『アラブが

見た十字軍』リブレポート 一九八六

伊谷敏郎『三日月の世紀―「大航海時代」のトルコ、イラン、インド』新潮社(選書) 一九九〇

スレイマン・ムーサ(牟田口義郎・定森大治訳)『アラブが見たアラビアのロレンス』リブポート 一九八八

イブン・ハルドゥーン(森本公誠訳・解説)『歴史序説』全

3巻(イスラーム古典叢書) 岩波書店一九七九・八七

W・モンゴメリ・ワット(三木亘訳)『地中海世界のイスラ

ム・ヨーロッパとの出会い』筑摩書房(叢書) 一九八四

ジクリト・フンケ(高尾利数訳)『アラビア文化の遺産』み

ずず書房 一九八二

D・F・アイケルマン(大塚和夫訳)『中東―人類学的考

察』岩波書店 一九八八

E・ゲルナー(宮治美江子・堀内正樹・田中哲也訳)『イス

ラム社会』紀伊国屋書店 一九九一

宮治一雄編『中東のエスニシティ』アジア経済研究所 一

九八七

大塚和夫『異文化としてのイスラーム―社会人類学的視点

から』同文館 一九八九

『イスラム世界の人びと』全5巻 東洋経済新報社 一九

八四

1 総論(上岡弘二・中野暁雄・日野舜也・三木亘編)

2 農民(佐藤次高・富岡倍雄編)

3 牧畜民(永田雄三・松原正毅編)

4 海上民(家島彦一・渡辺金一編)

5 都市民(三木亘・山形孝夫編)

大野盛雄『イラン農民二五年のドラマ』日本放送出版協会(NHKブックス) 一九九〇

大野盛雄『フィールドワークの思想―砂漠の農民像を求めて』東京大学出版会(UP選書) 一九七四

大野盛雄『アフガニスタンの農村から―比較文化の視点と方法』岩波書店(新書) 一九七一

岡崎正孝『カナート イランの地下水路』論創社 一九八八

末尾至行『トルコの水と社会』大明堂 一九八九

片倉もとこ『アラビア・ノート―アラブの原像を求めて』

日本放送出版協会(NHKブックス) 一九七九

松原正毅『トルコの人びと―語り継ぐ歴史のなかで』日本

放送出版協会(NHKブックス) 一九八八

松原正毅『遊牧の世界―トルコ系遊牧民ユルックの民族誌

から』(上・下) 中央公論社(新書) 一九八三

B・S・ハキーム(佐藤次高監訳)『イスラーム都市―アラ

ブのまちづくりの原理』第三書館 一九九〇

ウンニ・ヴィカン(小杉泰訳)『カイロの庶民生活』第三書

館 一九八六

『講座イスラーム』全4巻 筑摩書房 一九八五・八六

1 イスラーム・思想の営み(中村廣治郎編)

2 イスラーム・転変の歴史(森本公誠編)

3 イスラーム・社会のシステム(佐藤次高編)

4 イスラム・価値と象徴(板垣雄三編)

中村廣治郎『イスラム―思想と歴史』東京大学出版会(U

P選書)一九七七

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波書店 一九八一

井筒俊彦『コーランを読む』岩波書店 一九八三

H・A・R・ギブ(加賀谷寛訳)『イスラム―誕生から現代

まで』東京新聞出版局 一九八一

W・M・ワット(牧野信也ほか訳)『ムハンマド―預言者と

政治家』みすず書房 一九七〇

R・ベル(熊田亨訳)『イスラムの起源』筑摩書房(叢書)

一九八三

井筒俊彦『イスラーム生誕』中央公論社(文庫)一九九〇

(一九七九)

板垣雄三・佐藤次高編『概説イスラーム史』有斐閣(選書)

一九八六

前嶋信次『イスラム文化と歴史』誠文堂新光社 一九八四

前嶋信次『生活の世界史7 イスラムの蔭に』河出書房新

社 一九七五

嶋田襄平『イスラムの国家と社会』(世界歴史叢書)岩波書

店 一九七七

山形孝夫『砂漠の修道院』新潮社(選書)一九八七

山形孝夫『レバノンの白い山―古代地中海の神々』未来社

一九七六

村山盛忠『コプト社会に暮らす』岩波書店(新書)一九七

四

板垣雄三編『世界の女性史13・14』(中東・アフリカ I 東

方の輝き II 閉ざされた世界から)評論社 一九七七

ナウル・エル・サーダウイ(村上真弓訳)『イヴの隠れた顔

―アラブ世界の女たち』未来社 一九八八

ナウル・エル・サーダウイ(鳥居千代香訳)『神はナイルに

死す』三一書房 一九八八

イザベル・エベラール(中島ひかる訳)『砂漠の女』晶文社

一九九〇

J・A・アフマド(山田稔訳)『地の呪い』アジア経済研究

所 一九八一

マフムト・マカル(尾高晋己・勝田茂訳)『トルコの村から

―マフムト先生のルポ』社会思想社 一九八一

H・バラカート(奴田原睦明訳)『六日間』第三書館 一九

八〇

ユーセフ・イドリース(奴田原睦明訳)『ハラーム[禁忌]』

第三書館 一九八四

ターハー・フサイン(田村秀治訳)『わがエジプト―コーラ

ンとの日々』サイマル出版会 一九七六

『現代アラブ小説全集』全10巻 河出書房新社

1 ターハー・フサイン(池田修訳)『不幸の樹』一九七

八

2 タウフィーク・アル・ハキーム(堀内勝訳)『オリエ

ントからの小鳥』一九七八

- 3 シャルカウイー(奴田原睦明訳)『大地』一九七九
- 4・5 ナギーブ・マフフーズ(塙治夫訳)『バイナル・カスライン』上・下 一九七九
- 6 ハリーム・バラカート(高井清仁・関根謙司訳)『海に帰る鳥』一九八〇
- 7 ガッサン・カナファニー(黒田壽郎・奴田原睦明訳)『太陽の男たち・ハイファに戻って』一九七八
- 8 アッ・タイーブ・サレフ(黒田壽郎・高井清仁訳)『北へ遷りゆく時・ゼーンの結婚』一九七八
- 9 ムハンマド・ディブ(篠田浩一郎・中島弘二訳)『アフリカの夏』一九七八
- 10 ムールード・マムリ(菊池章一訳)『阿片と鞭』一九七八

(ごとう・あきら／神奈川大学経済学部教授)
(さいとう・ふみこ／湘北短期大学講師)